

## 2021年度の高等学校助成結果報告

### 1. はじめに

近年外来生物による被害が問題視されており、埼玉県においてはアライグマやクビアカツヤカミキリなどが代表的なものとして挙げられる。そこで2013年に県内の高校生を中心とした「チームアライグマ」を結成し、アライグマとクビアカツヤカミキリの生息分布や我々に及ぼす影響を、各学校が継続的に調査し結果を公表している。

### 2. 助成内容

- ・ 自転車 27インチ、6段変速（防犯登録料・賠償責任保険料含む） 2台
- ・ 調査地までの交通費

### 3. 調査実績

年間4回、定期的に現地調査を実施しており、自転車は継続して使用している。調査対象とする特定外来生物は以下の2種である。

#### アライグマ

- ・ 北アメリカ原産国なので、日本では2005年に特定外来生物に指定。
- ・ 森林や湿地、農耕地から都心部など、幅広い環境に生息。
- ・ 雑食性で畑や果樹園などの農作物、また家畜なども襲うことがあるため、駆除が行われている。

#### クビアカツヤカミキリ

- ・ 雑熱帯地域原産の外来生物。日本では2018年に特定外来生物に指定。
- ・ 公園や市街地の街路樹など（バラ科、特にサクラ）に寄生。
- ・ 樹木内部を幼虫が食い荒らすことで枯死することが問題となっており、早急な対策が求められている。食性で畑や果樹園などの農作物、また家畜なども襲うことがあるため、駆除が行われている。



### 4. 調査方法

#### アライグマ

- ・ 熊谷西高校を中心とした半径5km圏内の寺社で爪痕や足跡の調査。
- ・ 爪痕や足跡の確認が古いものか新しいものか判断するのが難しく個体の減少もみられるため、センサーカメラを使って調査する。



クビアカツヤカミキリ

・熊谷西高校周辺の小中学校に生えているサクラの木の木の本数と、フラスがみられた木の本数の調査。

5. 結果

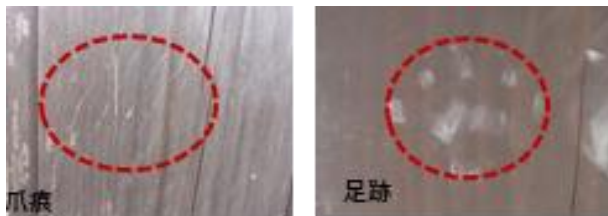
アライグマ

- ・今までの調査と同様、アライグマを確認数が少なかった。
- ・アライグマの数に比べ、圧倒的にネコの確認数が多かった。

12月～1月	アライグマ	ネコ	カラス	ハト	ハクビシン
幸安寺	1	8	9	6	0
大正寺	0	1	0	0	0
大栄神社	0	12	12	2	1
玉井浅間神社	0	0	0	0	0
龍泉寺	2	19	0	0	0
<b>合計</b>	<b>3</b>	<b>40</b>	<b>21</b>	<b>8</b>	<b>1</b>



現地調査の様子



アライグマの爪痕と足跡



センサーカメラに映ったアライグマ

クビアカツヤカミキリ

- ・熊谷西高校周辺の小中学校を調査していた結果、被害のある場所、被害本数ともに増えた。
- ・フラスの量も以前に比べると明らかに増え、成虫も多く捕殺した。

学校	調査本数(本)	6月4日の被害本数(本)	9月18日の被害本数(本)
三尻小	15	2	7
籠原小	24	0	3
玉井小	6	0	1
幡羅小	15	5	10
玉井中	29	5	9
大麻生中	14	1	3
三尻中	13	1	5
<b>合計</b>	<b>116</b>	<b>14</b>	<b>38</b>



実際に確認したフラス



捕殺した個体を用いた標本づくりの様子

## 6. 考察

### アライグマ

- ・コロナ禍による人の活動の減少で、周辺に畑や果樹園がある市街地へ分布を拡大していると仮定し、前回と調査場所を変えて調査を行ったが、アライグマはほとんど確認することが出来なかった。
- コロナ対策の規制緩和により人の活動が再び増加したため、市街地への分布を拡大しなかった。
- ・アライグマの確認数に比べ、ネコの確認数が圧倒的に多かった。
- アライグマの数に比べネコの数が多いため、ネコの縄張りである場所にはあまりアライグマが近づくことができず、市街地に生息することができなかった。

### クビアカツヤカミキリ

- ・前回の調査に比べてサクラの被害本数が増え、フラスの量も多くなっている。また、去年は成虫を捕獲することは出来なかったが捕獲した。
- 被害を抑える為に対策をしている場所（さくら運動公園、熊谷ラグビー場）もあるが、クビアカツヤカミキリの繁殖力に対策が追い付かず、成虫が増え、それに伴い幼虫の数も増えている。

## 7. 展望

### アライグマ

- ・コロナ禍による人の移動を見ながら、調査場所を市街地から元々調査していた住宅が少ない場所に戻し、引き続きセンサーカメラで生息を調査していく。
- ・ネコの生息数とアライグマの生息数に関係があるのか、ネコ、アライグマともに確認数の多かった場所で引き続きセンサーカメラを設置し調査する。

### クビアカツヤカミキリ

- ・現在の調査場所を引き続き調査し、さらに、サクラが多く生えている場所で、クビアカツヤカミキリの被害が発生していないか調べる。

## 8. 生徒の感想

- ・調査地点を考える中で、川の近くや田畑など生息数の多い場所の地理的な傾向や、分布の動向がはっきりと分かるような調査の方法を考える必要があると思った。また、センサーカメラの設置期間をできるだけ長くしたり、クビアカの調査頻度をもう少し増やしたりして、より正確な考察が立てられるようにすると良いと思う。
- ・この活動を通して、アライグマとクビアカツヤカミキリは年々被害を増やし寺社の柱やサクラの木に大きな被害を与えていると実感できた。まだ一般の人には被害が十分に認知されていないのでこのチームで調査を継続し、少しでも被害を抑えていかなくてはいけない。また、高校間での交流を増やし、意識を高めていくことが重要だと思う。
- ・この活動は代々受け継がれてきた研究なので、継続的にデータをとることで次の代へと繋げていきたい。
- ・クビアカツヤカミキリの調査を通して、将来本当に日本からサクラがなくなってしまうかもしれないと思った。クビアカツヤカミキリの天敵はいないのだろうか。人力による対策では手に負えない気がした。